L'uomo che guarda

視る男

アルベルト・モラヴィア

千種 堅訳

視る男

アルベルト・モラヴィア
千種 堅訳

Hayakawa Novels

L'UOMO CHE GUARDA

by Alberto Moravia
Copyright © 1985
by Gruppo Editoriale Fabbri,
Bompiani, Sonzogno, Etas S. p. A.
First published 1986 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by arrangement with
Gruppo Editoriale Fabbri,
Bompiani, Sonzogno, Etas S. p. A.
through Tuttle-Mori Agency, Inc.,
Tokyo.

検印
廃止

視る男

昭和61年8月15日　初版発行

著者　A・モラヴィア
訳者　千種　堅
発行者　早川　清

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京(252)3111(大代表)
振替　東京・6-47799

印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　中央精版印刷株式会社

定価　1300円
ISBN4-15-207635-6 C0097

視

る

男

日本語版翻訳権独占
早　川　書　房
© 1986 Hayakawa Publishing, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

1 わが生涯の、とある一日をプロローグに 5
2 色褪せてピンクの貝殻 35
3 運命の悪戯 61
4 父と息子 73
5 中国料理店のセックス 99
6 視る悪魔 126
7 書物の並ぶ廊下 140
8 平手打ち 157
9 パロディー 187
10 二つの寓話 199

11 アパート 215
あとがき 233
モラヴィアの作品 237

1　わが生涯の、とある一日をプロローグに

六時三十分。少ししか眠っていない、せいぜい夜、六時間。そして目が覚めるとすぐ、めったにない思考という名の営みに五分、十分をあてる。何を考えるのか。口にするのも滑稽とみえるかもしれないが、世界の終末についてだ。いつ、どのようにして、こんな習慣がついたのかは知らない。おそらくそんなに以前のことではなくて、大学で物理の教授をしている父の机で偶然みつけた本を読んだあとのことだろう。核戦争について書かれた数々の本の一冊だ。でなければ、どのようにして現われたかは知らないが、その後、植物が育つと種が消えるようにして、私の記憶から消えてしまった何か別の動機があったのかもしれない。だからといって、核戦争のことを考えているなどというのは口はばったいことだ。いうなれば、そんなことは考えられないということを考えている。ただ、起床後のその五分、十分というもの、ほかのことを考えていないのは疑いのないところだ。

これはやはり言っておかなくてはならないが、爆弾のことを考えるこの早朝の一刻はおそらく、私が本気になって、つまり抽象的に考えごとをする一日でも唯一の時間ではなかろうか。というのも、

私はもっぱら目を通して生きているからで、この十分間は二十四時間の中でも、考えごとに適した条件に恵まれる唯一の時間だからである。暗闇の中では、することとてなく、分けても見るべき対象が何ひとつない。その余の時間はいつも何かをするか、見るかしていて、何かをしたり、見たりしていると、私は考えごとを妨げられる。しかし、一日に五分、十分の思考でもひょっとして充分なのではあるまいか。現に世界の終末という考えはたちまち、固定観念になっていた。日中にはそれを忘れている。これは事実だ。ところが、二十四時間後に目が覚めるやいなや、依然として同じ変わりばえのしない、いかにも思い詰めた、そして何よりも思いもよらない考えにとりつかれているのに気づいて愕然とする。

七時。隣に眠っているシルヴィアを起こさないよう気遣いながら、私は起きだす。すっ裸で、素足で歩き（なぜか知らないが、パジャマ、ガウン、スリッパの類はかつて身につけたことがないが、おそらく無意識のうちにブルジョワの享楽主義に刃向かっていたのかもしれない）、狭い、いびつな浴室に入って行くが、これは父親が私と妻のために広いアパートの一隅にしつらえてくれたものだ。浴槽はなくて、斜めの天井が低くなっているところにシャワーが取り付けてあるだけで、私より背の低いシルヴィアは顔を上げてシャワーを浴びるのに対し、彼女より背の高い私は首をすぼめて浴びる。

シャワーのあと、慣れた手つきで小窓のガラスについた蒸気の曇りをぬぐいとり、中庭に目を向けて、切り立つ飾り気のない外壁の上の空を見渡すが、お天気のほどを見ようというわけだ。それから髭をあたるため、洗面台の鏡の前に立つ。

今度は髭の問題が生じる、かみそりを使うべきかどうかだ。私は髭が濃くて固いため、剃りにくい。

それに加えて、面倒くさがり屋だし、身なりに無頓着なので、結局、剃る日もあれば、剃らない日もあるということになる。剃ったものかどうか、ああでもない、こうでもないと考えながら、その間に自分を眺める。自分の姿がまるで他人のように思えて、興味をそそられる。

私は三十五歳の美男子、だが、いい男ではない。この違いが重要だ。顔形は雄々しいと同時に弱々しく、淡い目の色で、詮索するような、しばしば皮肉な感じの視線になるが、眉は勢いがなく、下に垂れている。鼻は高く、断固としながら、穴のところがすぼんで、見るからに小うるさい。口はといえば、歯ならびが白く、狼のようにとがっていながら、唇は肉感的で柔らかい。黒々と生きのいい髪だが、生えぎわとこめかみのところは、早くもまばらになっている。顎の張りだしたところは意志が強そうなはずなのに、先にいくとしゃくれて、中央にくぼみが出来ている。あとはどうなっているのか？　身体の他の部分も見てみたいのだが、あいにく鏡が高いせいで見えない。少なくとも家を変わるまでは、毎朝、顔を見るだけで我慢するほかないだろう。

とはいっても、服を着たすぐあと、控えの部屋を通って、小机の上に掛けてあるくすんだ、傷だらけの古風な鏡にちらりと目を走らせたときには、身体の他の部分も目に入る。そういうとき、いらだちと満足感がこもごも混じる思いで、われとわが姿を見ると、よく、知識人代表ということで紹介される特別な人物がいるものだが、そんな人でも見ている気がする。確かに私は知識人だし、身につけているものを見れば、すぐにそれと分かる、中世の昔、着ているものを見れば聖職者の区別がついたように。青シャツに黒のネクタイ、紺か茶のセーターを着て、革の肘当てがついた緑かベージュのコールテンの上着、ブルージーンズかグレーのフランネルのズボンをはき、靴は黒っぽいカモシカ革の、

〝荒れ地〟向きといわれる代物。しかし、知識人っぽいといえば、そうした衣類の古びて疲れたところである。肘当ての革はてかてか光り、シャツはすりきれ、ネクタイは古くてよじれ、ズボンはずっと以前から筋がなくなっている。そのうえ、このいわゆる〝フリーな格好〟のほかに私が持っているといえば、大切な時、つまり式典、公式の会合、レセプションなどなどに着る紺の背広上下が一着だけである。

七時三十分。服を着るとすぐ、ここの建物があるローマ旧市街の路地に下りて、角の売店に行き、父親のため新聞を買う。大きな自動車事故で、父親がもう三カ月も寝たきりになって以来、あれこれ代わりにしてやっているが、〝以前〟だったら自分が引き受けることになるなど、夢にも思わなかった仕事である。なぜ〝以前〟だなどと括弧でくくったりしたのか。それは、あの事故の日以来、私は言ってみれば、知識人であるほかに息子であることも発見したからである。

しかし、〝以前〟だって、息子ではなかったのか。戸籍上はそうだった。しかし、内心では父親が自分にとっては完全な他人であると思っていたし、そうであるよう願っていた。では、この変化はなぜなのか。これは本当のことなのだが、視線のせいである。ただただ、事故の当日、父親が階段で私に向けた視線のせいにほかならない。

その朝、この建物の老朽化したエレヴェーターは例によって壊れていた。そこで、私は暗い、いかめしい感じの階段を歩いて下りはじめた。ぴかぴか光る石灰華の低い段と、古代の大物の胸像を飾った広い踊り場。と、最後の階まで下りたところで、異様な一行と出会った、二人が担架を運び、担架には男がひとり横たわっていた。私は横にどいたが、それが父親だとはまだ気づいていなかった。だ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が、担架とすれちがったところで、名前を呼ばれるのが聞こえ、担架の男が父親だと分かった。仰向けになって、顎のところまで毛布にくるまれ、みごとな白髪は乱れ放題、ふだんは血色の良いその顔が目も当てられないほど蒼白になっていて、私が気づいたかどうか確かめようとばかりに、じっと視線を注ぎ、やがて、何とかほほ笑もうとしながら口を開いた。「なんでもない、ありきたりの自動車事故なんだ、どうってことなかった」私のことを呼んだとき、担架を運んでいた男たちは立ち止まったが、いままた階段を上りはじめた。で、私はひとことも言わずに向きを変え、一行の後について階段を上って行った。

私と父親の関係の変化を決定づけたこの視線だが、それがどんなものか、そろそろ知りたいと思っておられるだろう。それはこうだ。つまり、もはや父親が息子に向ける視線ではなく、苦しむ人が他人に向けるものだった。興味しんしんの矛盾撞着ぶり、何と男が男に向けた視線のせいで、私はそのとき以来、まさに息子が父親に対するように振る舞いだしたのである。

自宅まで上って行くと、キッチンに入るが、これが戦後そのままの古いキッチンで、白いニスを塗ったのがすっかり剝げ落ちた大きな食器棚がふたつ、大がかりな堂々としたレンジ、大理石張りの大きなテーブル、詰め藁をした腰掛けなど、これら旧式の品物の中央にでんと置かれているのが巨大な、最新式の冷蔵庫である。キッチンは薄暗がりだが、これは中庭に面して一つだけある狭い窓から明かりを取っているからだ。電気をつけて、父親の食事の用意に取りかかる。

確かに私としては父親をあと半時間、待たせても構わないはずだ。八時になれば、父親の隣室で眠っている老看護婦のリタが来てくれるのだから。もちろん、パートの女性にもっと早く来てもらうよ

うにすることだってできる。彼女は十時に現われて、掃除と昼食の支度をし、晩は夕食を調理してから帰って行く。だが、父親との新しい奇妙な関係を理解するうえで、指摘しておくべきだろう。ほかでもない、事故のあとに変化が起こったのを強調しようとばかりに、まずは彼の朝食の支度は私がやることと、暗黙の了解がついていたのである。こうして、それこそ念入りにパンを何片か切り分けて、トースターに差し込み、コーヒー沸かしを火にかけ、コーヒー茶わん、ミルク、バター、蜂蜜、ヨーグルトの小瓶を盆にのせるが、ほかに何があったかな。そうそう、紙ナプキンがあるが、二度に一度は忘れてしまう。パンを焼き、コーヒーを沸かしている間、テーブルに向かって坐り、新聞に目を通す。やがてトーストの匂いがキッチンに広がり、コーヒーがあふれこぼれると、腰掛けから跳びあがってレンジを消し、パンを小皿にのせ、新聞を二部、盆に寝かせ、両手で持って出て行く。両側を本棚で埋めつくされた狭い曲がりくねった廊下を、盆がすべらないよう、ゆっくりと歩いて行く。キッチンや私の二つの部屋がある一端と、父親の住んでいる反対の端をつなぐ廊下である。要するにボーイの仕事をやっているわけだが、仕事をしながら、いま一度考えてみる、父親のところへ食事を届けるのもまた、事故の前には夢想だにしなかったことだと。しかし、なんといっても、それを飽きもせず、いや、それどころか、孝行息子もさこそと格別な献身ぶりで勤めているが、あまりにも度を越えた用心深さで、わざとらしいぐらいだ。

行ってみると、父親はすでに目を覚ましていて、パジャマを着たまま、クッションをふたつ背にしてベッドに坐り、櫛と、常に手の届くところに置いてある鏡を使って、髪を整えているところだ。本当の化粧は朝食後、看護婦がやってくれることになっている。しかし、とりあえず、髪の乱れたとこ

ろを見られないように気をつかっているのだ。

父親は、隣の小さめの寝室には看護婦に眠ってもらい、自分のベッドは大きめの書斎の、二つの窓の横に置くように望んだが、いま、髪に櫛を入れたあとは、ローマの屋根で起こっていること、というよりも、起こっていないことを見ようと、二つの窓に目を向ける。「おはよう、どう、具合は」と私が言うと、彼は振り返りもせずに「まあまあさ」と返事をする。それから、一瞬、間を置いて、振り向くと、手で下のほうを指してみせ、「頼むよ」と口にする。私には分かっている。盆をワゴン・テーブルにのせて父親の胸のあたりに行くように押していき、それから、身をかがめて、ベッドの下から、何となく鳥の形のデザインのせいで、おうむという名で呼ばれるガラスの容器を引っ張り出すが、もう尿で一杯になっていて、まだ温かい時もある。中央に手をかけ、少し離すようにして支えもち、トイレへ捨てに行く。別に誰に頼まれたのでもないのに、他人に任す気になれないこの作業、それをやるたびに私はトイレの鏡をのぞきこみ、なんというか、苦悩にみちみちた表情を自分の顔に認める。そういうとき私はひょっとして、自分は無意識のうちにせよ、自分を罰したくないのでは、あがないたくないのではと疑念を覚える。しかし、何で自分を罰し、どんな罪をあがなおうというのか。

きちんと洗い直したおうむを手に、トイレから戻ると、父親の手の届くよう、ベッドの下に納める。それから、彼の正面の肘掛椅子に坐る。父親といっしょに朝食を取ることはなく、むしろ、遅い時間に、階下の路地にある喫茶店で済ますという、馬鹿みたいな習慣を守っている。そこで、父親が食べている間、私としては彼を眺めているほかなくなる。まるで、その顔を観察することを通じて、彼に対する自分の態度が変わった深い動機を探ってみたいとばかりに、とりわけ注意深く眺める。

父親は私とは逆で美男子ではないが、いい男である。言わんとしているのは、きれいな頭なのに小さくて、高い背丈や肩はばの広さには、なんとなくスポーツマンらしさが感じられるのに、頭にはそれがないということだ。眉が炭のように黒々とした赤ら顔が、若々しく波打つ銀髪に縁取られ、鼻は湾曲して威圧的、獰猛な官能的な口、明るい目には、相手をじっと見据え、当惑させるような輝きがある。美しいのは美しいが、少なくとも私にとっては、なんらかの形で枢要なポストと結びついてみえる。それが父の美しさである。大学の実力者として著名でもあれば、尊敬も集めている学者としての美しさ、要するに取りかえしのつかないまでにアカデミックな美しさである。なぜ、取りかえしのつかないなどという言い方をするのか。それは、私との関係に彼のこの性格がどうしようもないほどに、まさに取りかえしのつかない形で関わってきているからだ。幼いときから、せっかく愛情をもって接しながら、そのたびに、ふと、まるで透明だが破れることのないガラスそのままに、職業的威厳といったものが割りこんでくるのを感じていたが、そのため、私は彼を賛美はしても、愛することはできなかった。幼年時代、この愛情の交流ができない理由をつきとめることができないまま、結局、自分が臆病なせいだと決めこんでいた。その後、青年期に入ると、悪いのは父親が自分の社会的地位から抜け出られないせいだということにして、それ以来、彼に対して次第に敵意のようなものを覚えるようになっていた。といっても、本当のところ、必ずしも自分が悪いのではないと、心底、確信していたわけでもない。それにしても、なぜ、こんなことになったのか。父親に対しどんな過ちを犯したというのか。毎朝、彼が食事をするのを眺めながら考えるが、いい返事は浮かんでこない。

父親はヨーグルトの小瓶を空にし終える。それから、注意深くコーヒーとミルクをカップに注ぎ、

パンにバターを塗り、バターの上に薄く蜂蜜をのばす。食べながら、こんなふうにやっているのを見ただけで、昔はいらいらさせられたのに、いま、ふたりの関係が変わってみると、父親はどんなことをやっても、完璧に自制心が働くのだなと認めざるを得ない。穏やかに食べているが、見たところ味わっている様子はない。話しかける声もまた穏やかで、甘い優しい口調だが、さりげないにせよ、どこか横柄なところがある。どんな天気か、夕べシルヴィアとどんな映画を見たのか、どこで夕飯を食べたのかなど、ほかにも似たようなことを私にたずねる。だが、私に言わせれば、儀礼的に訊ねているだけで、興味などは全然ない、というか、好奇心はあるのだが、なぜかそれを偶然にしたように、無関心にみせかけようと意図している。最後に、自分の義務を果たした人よろしく、黙りこくり、目を窓のほうに向けて食事を続ける。そこで、私は新聞を手に取り、読みはじめる。コーヒーを飲まなければ、何か食べなければいけないと感じながら、そして口の中で寝覚めの苦い味わいを転がしながら、マッサージ師が着くまでかたくなに彼の相手を勤める。この先生、きっかり、父親が食べ終わった瞬間に登場する。

マッサージ師は、髪の毛の不足分を髭の茂みで補おうとばかりに、つるっ禿の口髭の濃い小男で、手品師よろしく折畳みの黒い鞄を持っていて、まずは上着を脱いで、シャツとズボン吊りだけといういでたちになり、こうして、いかにも二〇年代の無声映画のコメディアンそっくりなところを強調してみせる。彼は専門家一筋という態度に徹しながらも、楽天的な愛想の良い態度を安売りして饒舌である。父親は父親で、この職業的な愛想に結構満足していて、ここはひとつ頼り切っているところを見せてこそ、正しくも、まっとうな上策と考えているかのようだ。

マッサージ師は父親のマッサージの準備をしながら、陽気に、取ってつけたように声を上げる。「すぐですよ、先生様、立てるようにしてさしあげます。そうすりゃ、もう、新しい人生です、先生様、新しい人生ですって」父親は父親で他人行儀に取ってつけたように返事をする。「しかし、七十歳になって、何が新しい人生だね、オズワルド。せいぜい、寄る年波を少々加えただけの人生だろうに」

いまマッサージ師が毛布をのけると、父親はしわだらけのシーツの中央に身を横たえ、こちこちになっているかにみえる。父親はパジャマのズボンの紐の結び目をほどき、待ちかまえていたマッサージ師はズボンをくるぶしのところまで下げる。父親は事故で大腿骨を折っていて、マッサージ師は腿の筋肉の上で腕前の程を披露におよぶ。

それにしても、いやはや、父親の頭と身体の違いようといったら。色白に過ぎる腹に、黒きに過ぎる毛深さで、下よりも上のほうが不釣合いに膨れてみえ、腿は筋肉が欠けてみえるほど、肉が落ちて血の気がなく、この脚が痩せているあまり、膝と足があまりに大きく見えることになる。ところが、シロッコの熱風が吹く春の空から注いでいる白っぽい明かりの中で見ると、ふさふさした恥毛に囲まれ、大きな、これみよがしの睾丸の上に鎮座した形の陰茎は肉体の老化した様子とはおよそ相容れない。また、ほかの部分と違った色で、ずっと黒みがかり、まるで父親がその部分だけ太陽を浴びたというように、焦げ茶色になっている。それに常時、半立ち状態というような尋常ではない大きさだ。

この彼の異常な陰茎は小さいときから私にとってはショックで、それというのも、ズボンの下にありありとその存在を窺わせる円筒形のふくらみがはっきりと見て取れたからだ。その後、なぜかは知

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com